

ヒューマンエコロジー思想とホームエコノミクス運動(1)

ホームエコノミクス運動とその時代—社会改良運動とホームエコノミクス—

○香川 晴美*、住田 和子** (*山陽学園短大、**藤女子大)

【目的】E.H.S.リチャーズ(1842-1911)は、およそ1世紀前(1892)、正しい生活を導く新しい知識体系を、エコロジー(Oekology)と命名し、健康で幸福な家庭を築くための環境科学を提唱した。本研究は、リチャーズは何ゆえに新しい科学を提唱したのか、なぜ全ゆる応用科学のうちで最も価値ある学問として家政学を考えたのか、さらに彼女のヒューマンエコロジー思想はいかに形成されたかを、当時の時代背景との関わりで究明するものである。第1報ではホームエコノミクス運動に焦点を当てる。本テーマは、新しい世紀における家政学の存在意義を改めて問う試みである。

【方法】リチャーズの著した原典(*The Cost of Living, Sanitation in daily life, Euthenics etc.*)を中心とした一連の文献研究であるが、とりわけ第1報ではその端緒として、初期の *Journal of Home Economics* に掲載された彼女の著作を中心に、関係史料の精査をも並行させて展開する。

【考察】リチャーズにとって、ホームエコノミクス運動は、子どもの幸福を願ってやまない社会の浄化と結びつく教育の過程である、健全な家庭生活を実現する社会改良運動であった。それは、社会に対する責任を備えた「善き市民の育成」を意味した。当時の社会では、母親たちの不注意や無知のため、子どもたちの半数が初誕生をむかえられず、やっと3才まで生き延びてきた子どもたちの多くが健康という生得権を奪われていた。尚、彼女は *Sanitation in daily life* の中で、ヒューマンエコロジーを、「生命に及ぼす影響に配慮して、人間の生活を研究する科学」と規定している。